Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **42**, 97－102(1994)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

姫路市小学校教員におけるダンス教育の現状とその意識

北　島　見　江

（武庫川女子大学文学部教育学科）

Actual situation and the consciousness of dance education on elementary school teachers in Himeji

Mie Kitajima

Department of Physical Education, Faculty of Letters

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

In school education, It is very important to cultivate the activity of self-representation. And on this point, dance education is one of the most important subject. But in todays education feld, creative dance at school tend to be shunned by teachers. For they have little experience of dance and have difficulties to resarch many other teaching materials. There, this time I made a questionnaire object elementary shool teachers in Himeji. This is the research on the actual condition of dance situation of the classwork and on the conciousness of dance education by teachers them selves.

緒　　言

児童，生徒の全面的な発達を目指す学校教育の場において，自己思想や感情表現の表出能力を育成することは非常に重要な事柄である．そして，これらの教育は，言語や数，あるいは自然社会に対する知識を育成する知的教育と，芸術・スポーツなどを通し自己表現能力の向上を目指す情操教育の両面が考えられる．

今日，わが国の学校教育の現状は，学歴社会重視の傾向が強く，その影響のためか子供達の生活は大きく変化してきている．放課後の生活の過密化．つまり，塾・稽古事に費やす時間の増加．加えて遊びの室内型や少人数化．自発的な活動の貧窮化等．物事に対しての見方，感性が深まる大事なこの時期に創造的な活動や仲間とのコミュニケーション活動等の経験を通し，全人的な人間形成を計らねばならない．

ダンス教育は，身体活動を通し，内的な運動表現を外部に広げ表現していく自己表現であり，その創造的活動を他者へ働きかけることで，児童相互の人間関係を深め，創り出すことの喜びや，共存することの喜びを通して，人間本来の姿を見いだせる重要な意味をもつことは周知の通りである．

しかし，これを担う現場での教育は，指導者としての教員養成中でのダンス履修経験度の低さや，指導内容の複雑さ，さらに他教科を含む教材の同時研究という煩雑さにおいて敬遠されがちな教科であることも認めざるを得ない．そこで，今回，小学校に於けるダンス教育の現状と教員自身のダンスに対する意識を調査することで，教育現場における問題点を探り，教員養成校である大学自身のダンス教育改善の一助としたい．

調査対象

1992年6月“姫路市ダンス実技研修会”参加の小学校教員100余名に質問紙法によるアンケート調査を実施．うち有効回答枚数72名分を調査対象として扱った．

結果及び考察

1　指導者の経歴

図−1における a) b) は，教員の出身大学を国・私立別，大学・短大別でみたものである．国・私立別では，国立 50%，私立 48.6% で約半数ずつを占め，短大・大学別では，大学 91.7%，短大 8.3% と，大部分の者が大学出身者であった．

表−1，表−2は，これら参加者の年齢，教職年数である．21 才から最高年齢 44 才までの間のうち 25〜40 才を 4 区分した各年齢層はそれぞれ約 20% 程度の参加傾向がみられた．また，これらの教職年数も最高 21 年を筆頭に 13〜16 年の者は 25% と 1/4 を占めかなり充実した中堅層の教師である．

図−2は，大学時代のダンス履修状況である．37.5% の者は履修経験が“ある”と答えたのに対し，60% の者は“ない”と回答をした．大学時代のダンス経験度はかなり低い．

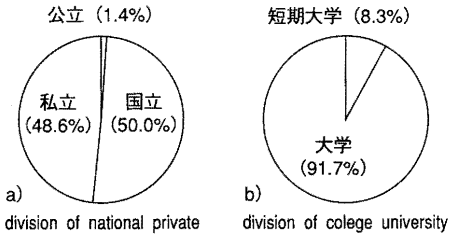


Fig. 1.　The graduate

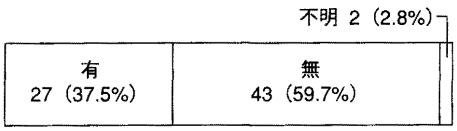


Fig. 2.　Dance experience in there University days

図−3は，指導者になるまでのダンス学習経験の内容を“うごく”“つくる”“みる”の学習に加え“表現の応用や指導に直接関連する指導法”“舞踊に関する基礎理論”の 5 分野に分類した．最も多くの者が経験した項目は，“うごく”分野の初歩的なステップや動きの 78.5% で，次いでフォークダンスの 66.7% であった．“つくる”経験では，グループの学習が中心である即興練習，即興での短い作品つくり，更に本格的な作品つくりなどはそれぞれ約 50% の者が経験を有している．また，それら互いの作品を鑑賞し評価を行う“みる”学習は 34.8% にとどまっており，将来指導する立場として必要となる指導法の学習は 10% の低い学習率で終了してしまっている．

Table 1.　The age

年数	n	%
21〜24	2	2.8
25〜28	15	20.8
29〜32	15	20.8
33〜36	16	22.2
37〜40	18	25.0
41〜44	5	6.9
不　明	1	1.4
合　計	72	100.0

Table 2.　The length of the teaching service

年数	n	%
1〜4	12	16.7
5〜8	17	23.6
9〜12	14	19.4
13〜16	18	25.0
17〜20	9	12.5
21〜24	1	1.4
不　明	1	1.4
合　計	72	100.0

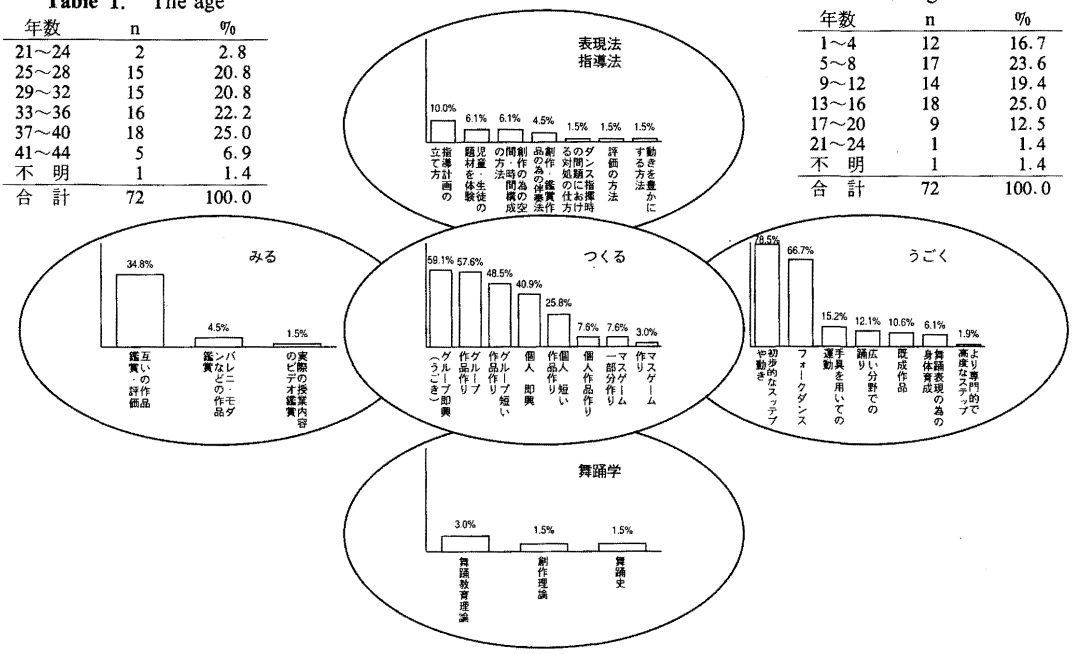


Fig. 3.　Content of dance study

2　指導者のダンス感

表−3は指導者のダンスに対する意識を，指導者自身について，あるいは指導者としての立場からみたダンスについて，非常に当てはまるものに5全く当てはまらないものを1とし，5段階評価の平均値を示したものである．

指導者自身のダンスに対する意識は，“自分の個性にあった踊りが踊れるので楽しい”が3.4“作品達成の喜びは何物にもかえられない”3.15とややプラス的な志向を示したが“作品を創ることに抵抗を感じない”“思っていることが表現できる”にはそれぞれ2.44，2.33と低い値であった．これは，個人の能力·レベルに応じた内容実施が可能であり，しかも目的達成感が味わえる価値をダンスに見いだしてはいるが，思い，感じていることを身体で表現することの困難さを感じているものが多いと推察される．これはマイナス要因の項目でも同様にみられ，上位4項目にあげられた“ジャズダンスなどは好きだが創作は嫌い”“自分で作品を創る事が苦手”“思うように動けずぎこちない”等，自己に内在するイメージを動きに転換する時点での問題や，自分自身の身体が思ったように動かせないといったような問題がやや高い評価であったことから指導者自身の創作に対する苦手意識がみられる．

Table 3.　Consiousness for dance

要因	高点順	項　　目	5段階評価 X
(+) 指導者自身として	1	自分の個性にあった踊りが踊れるので楽しい	3.4
	2	作品達成の喜びは何物にもかえられない	3.15
	3	意欲的に参加できる教科のひとつ	2.95
	4	踊ることが好きだし楽しい	2.88
	5	音楽にのって踊ることが出来る	2.85
	6	新しい動きやアイデアを考えるのが楽しい	2.75
	7	創作ダンスが好き	2.49
	8	自由に身体で表現できるので好き	2.49
	9	作品を創ることに抵抗を感じない	2.44
	10	すぐに動きが覚えられる	2.43
	11	思っていることが表現できる	2.33
(−)	1	ジャズダンス等は好きだが創作は嫌い	3.7
	2	自分で作品を創ることが苦手	3.3
	3	思うように動けずぎこちない	3.3
	4	イメージは浮かぶが動きにならない	3.27
	5	ステップ・表現方法がわからない	3.23
	6	上手な動きと比較してみじめ	3.23
	7	創作の仕方がわからない	3.18
	8	リズムにのって自由に動かせない	3.1
	9	教わって動くのは好きだが創作は嫌い	3.1
	10	教えるのが面倒	2.98
(+) 教師として	1	男子にも教える方がよいと思う	3.9
	2	学校教育の場でダンスを教えることは有意義	3.5
	3	意欲的に指導しようと思う	2.82
	4	女子にふさわしい運動種目だと思う	2.25
(−)	1	他の運動種目に比べ運動量が劣る	1.98

指導者としての観点からダンスを評価した場合について，“女子にふさわしい運動種目だと思う”が2.25“男子にも教える方がよいと思う”が3.9の評価を示した．これは，特にダンスは女子にふさわしいという概念ではなくダンスの男女共修の意志が推測される．また“学校教育の場でダンスを教えることは有意義である”が3.5の評価を示しているにもかかわらず“意欲的に指導しようと思う”には2.82と低い．ダンスの価値は認めるが教師自身の意欲度は低い傾向にある．次に，ダンス教育を体力的な観点から見た場合，体育教科としての運動量については，“他の運動種目に比べ運動量が劣る”に平均1.98の結果が得られている事から，運動量が必らずしも低いものではないことが推測される．

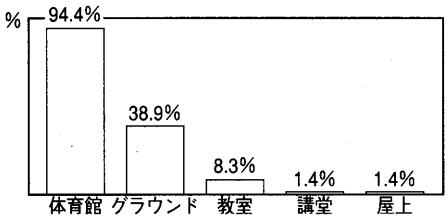


Fig. 4.　The plase of during lessons

Table 4.　Teaching aids in teaching

項　目	N	%
テープレコーダー	61	84.8%
タンバリン	42	58.3%
太鼓	37	51.4%
レコード	31	43.1%
視聴覚教材	8	11.1%
ピアノ	4	5.6%
その他	2	2.8%

図−4，表−4はダンス授業時の場所と利用頻度の高い用具をあげたものである．実施場所では体育館が最も多く利用され94.4%を示していた．また，指導時の用具については，テープレコーダーが84.4%，次いでタンバリン，太鼓がそれぞれ58.3%と51.4%の利用率であった．この事から，テープによる音響利用に加えタンバリンあるいは太鼓の組合せで授業が進められているように推察される．

図−5は指導者がダンス授業を実際に取り組んでいく際，立案が可能かどうかを示したものである．不可能であると答えたものは62.5%と過半数を大きく上回っている．その問題点の多い順に上位より示したものを表−5に示した．1．助言の仕方がわからない　2．児童がうごかない　3．自分で動いてみせられない等，授業を展開していく際の方向性，あるいは展開方法の知識不足，児童の前で示範出来ないという指導者自身の指導能力不足などがあげられている．

図−6は児童のダンスに対する興味度を指導者としての視点からみたものである．“児童は興味をもって取り組んだか”の問いに対して“はい”が40%“いいえ”が34.5%“どちらともいえない”が25.5%であった．教師側からの回答のためかやや悲観的な見方であることも見逃せない．

図−7は，講習会に期待する内容を希望順位にグラフ化したものである．希望のトップは“いろいろな動きが知りたい”43.3%，次いで，“発想を豊かにする方法”が34.5%であった．多様化した動きや身体の使い方だけでなく内在するイメージをどの様に膨らますかという題材の応用方法にも欲求度が高いことが考えられる．

Table 5.　The problem of teaching

項目	N	%
1. 助言の仕方が分からない	24	35.8%
2. 児童が動かない	18	26.9%
3. 自分で動いて見せられない	15	22.4%
4. 自分自身あまり好きでない	13	19.4%
5. 指導内容・過程が分からない	11	15.3%
6. 適当な伴奏音楽がない	10	14.9%
7. よい指導資料がない	9	13.4%

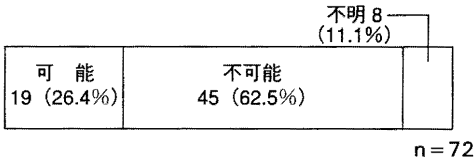


Fig. 5.　Possibility of making plan of dance teaching

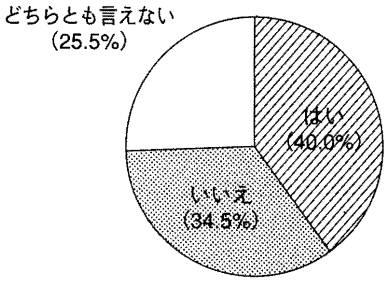


Fig. 6.　The question ;“Are peoples interested in or not ? ”

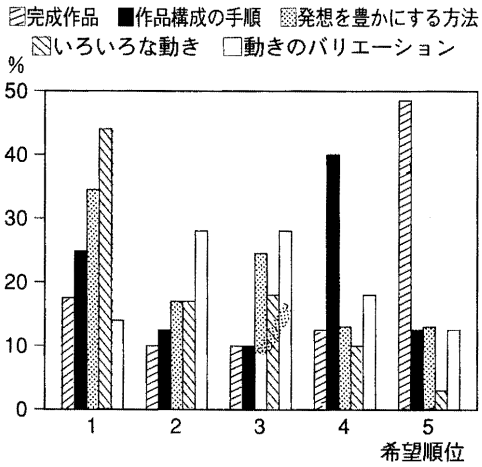


Fig. 7.　Demands for short course

Table 6.　Reference materials of teaching

1.	講習会での創る・踊る・観る経験	25	40.3%
2.	ダンス指導のフィルム・ビデオ	14	22.6%
3.	友人・同僚の助言	13	21.0%
4.	公開授業の見学	12	19.4%
5.	ダンス実践のテキスト	7	11.3%
6.	けいこ場でのレッスン	6	9.7%
7.	学習指導による専門書	5	8.1%
8.	大学時代の創る・踊る・観る経験	4	6.5%
9.	大学時代の指導法	2	3.2%
10.	ダンス研究会の参加	1	1.6%

表−6に指導者自身が授業研究として参考にするものをあげた．トップは講習会での“創る･踊る･観る”で40.3%を占めている．次いで，“ダンス指導時のフィルムやビデオ”あるいは“身近にいる友人や同僚の助言”にそれぞれ22.6%と21.0%を占めていた．大学時代での授業は創る･踊る･観る経験，さらにその指導法はそれぞれ6.5%，3.2%，と低い値である．卒業後何年もたっている現場指導者としては，指導者になってから必要とするその時その時の実体験や，身近にいる同僚のアドバイスが指導に役だっている事が多いといえる．

表−7は，ダンスに対する好嫌度をみる項目のうち“創作ダンスが好き”と感じている者は，どの様な要因に起因するのかを検討するため χ^2 検定により他の項目との有意差検定を示したものである．ダンスが好きだと感じている者は，“音楽にのって踊ることが出来る”“自分の個性にあった踊りが踊れるので楽しい”“踊ることが好きだし考えていることが自由に表現できるので好き”“作品が完成したときの喜びはなにものにもかえられない”“新しい動きやアイデアを考えるのが楽しい”といった“つくる”内容の項目にも1%の有意水準で有意に高い．踊ることの喜びや，楽しみ，そして創ることの達成感を感じとる事が出来るようである．そして，さらにこのダンス好きな者は，嫌いな者に比べ5%の有意水準で意欲的に参加できる教科の1つとして感じている者が多い．また，ダンスが嫌いな者は他に比べ“身体が思うように動かずぎこちない”“他の人の上手な動きと比較してぎこちない”そしてさらに“イメージは浮かぶが動きにならない”等と，5%有意水準で有意に高く身体的･肉体的な原因をあげている．

表−8は大学ダンス授業経験の有無別による授業立案計画の可能･不可能を表にしたものである．大学時代のダンス授業経験が未経験な者は授業計画立案が不可能と思っている者が一番多く30名の68.2%であった．3人のうち2人がダンス履修が未経験な上に，授業計画の立案不可能者がいる事を示している．

Table 7. Llkes or dislikes of dance and the primary factor

ダンス好嫌度				
	“好き”な者の要因	有意差	“嫌い”な者の要因	有意差
うごく	音楽にのって踊ることができる	★★	身体が思うように動かずぎこちない	★
	自分の個性にあった踊りが踊れるので楽しい	★★	他の人の上手な動きと比較してぎこちない	★
	踊ることが好きだし楽しい	★★		
うごく	自分の思っていることが表現できる	★★	イメージは浮かぶが動きにならない	★
	自分の思っていることを自由に表現できるので好き	★★		
	作品完成の喜びは，何物にもかえられない	★★		
	新しい動きやアイデアを考えるのが楽しい	★★		
	意欲的に参加できる教科のひとつ	★★		

★★ 1%水準で有意　★ 5%水準で有意

Table 8. Dance experience in ther University days and possibility of making the plan

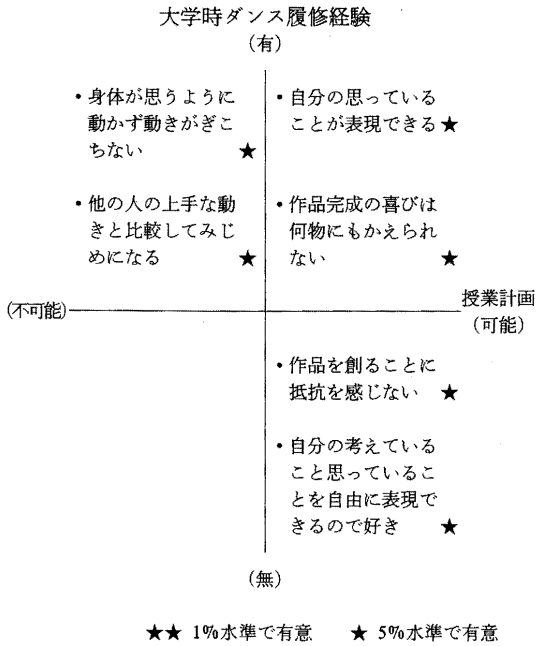
		大学ダンス授業経験		
		有	無	計
授業計画立案	可能	11 (57.9%)	8 (42.1%)	19 (100%)
	不可能	14 (31.8%)	30 (68.2%)	44 (100%)

Table 9. The possibility making the plan and the causees

指導計画					
	可能（要因）	有意差		不可能（要因）	有意差
つくる	自分の思っていること（考えていること）が何とか表現できる	★★	うごく	身体が思うように動けずぎこちない	★★
	作品を創ることに抵抗を感じない	★★		他人の上手な動きと比較して，みじめになる	★
	自由に表現できるので好き	★		どうしてもリズムにのって自由に動かせない	★
	作品完成の喜びは何物にもかえられない	★			
	大学時代ダンス履修経験あり	★			

表−9は指導計画の可能･不可能者の要因を示したものである．可能者は“自分の思っていること考えていることが何とか表現できる”あるいは“作品を創ることに抵抗を感じない”さらに“自由に表現できるので好き”や“作品完成の喜びはなにものにもかえられない”といった項目に1%あるいは5%の有意水準で有意に高く自由な感覚でものをつくり上げていく姿勢が見受けられる．次に不可能者の要因は，“身体が思うように動かずぎこちない”“他人の上手な動きと比較してぎこちない”“どうしてもリズムに乗って自由に動かせない”等の項目に1%あるいは5%の有意水準で有意に高く，いずれも自分自身の身体上の原因が不可能を決定ずける要因になっていることが判明する．

Table 10. Dance exprerience in the University days and the decisive the causees of possibility from making



表−10は大学時代のダンス履修経験の有無と授業立案計画の可・不可を決定ずける要因について示したものである．大学でのダンス経験を有し，なおかつ授業立案計画可能者は“自分の思っている事が表現できる”あるいは“作品の完成の喜びは何物にもかえられない”に5%の有意水準で有意に高い．履修経験はあるが立案が出来ないと思っているものは“身体が思うように動かず動きがぎこちない”や“他の人の上手な動きと比較して惨めになる”に5%の有意水準で有意に高い値を示した．また，さらに，履修経験はないが立案可能者は“作品を創ることに抵抗を感じない”“自分の考えていることや思っていることを自由に表現できるので好き”に5%の有意水準で有意に高い値であった．ダンスに対する好き嫌いの差は，まず身体が自由にコントロールでき，なおかつ動きつくりが可能なものは履修経験があり授業立案計画も可能である．しかし，経験はあるが立案が組めない者は身体を使って動く際の，身体上のコンプレックスを感じている者が多い．また，履修経験のないものはテクニックなどを駆使する際のコンプレックスは感じておらずつくることに価値を見いだしている事は興味深いものである．

ま と め

この度，ダンス教育に携わる指導者を対象にダンス授業の現状と指導者自身のダンスに対する意識を①ダンスの好嫌度別　②教員養成時期のダンス履修経験別　③ダンス授業立案計画を可能にさせる要因の3項目について調査し，ダンス教育をどの様に捉えているかを探ってみた．

1. 教員養成機関でのダンス履修経験者率は低く，学習経験者の内容は初歩的なステップやフォークダンスが大部分を占め，創作活動は約半数にとどまっている．また，更に指導法にいたっては10%の低い学習率で終了している．
2. ダンスの好嫌度で“好き”と感じている者は，自分自身の身体が意志どうり動かすことが可能であり“うごく”“つくる”両面においての達成感を感じることが出来，意欲的に参加しようと思う教科のひとつとしてあげている者が多い．
3. ダンス授業立案計画可能者は教員養成機関でのダンス経験者の方が多い．
4. ダンス授業立案計画を可能にさせる要因について，履修者では，身体を使って“うごく”“つくる”事への抵抗感がなく，作品完成の喜びを知り得ている者が多い．また履修経験の無い者でも創造的な活動に抵抗がなく表現することが好きな者に多く，いずれにしてもダンスに対する意識が“うごく”“つくる”の両面においてプラス的志向の者が多い．

以上の事より教員養成時期でのダンス経験はダンス指導を成功させる大きな鍵を握っているため，より多くの者にダンス履修経験を積み重ねる機会を与えられる履修制度の設定状況やその内容などを再検討する必要が急務と考える．さらに，現在既にダンス教育に携わっている指導者に対しては，再研修が容易に提供出来るシステムを構築する必要性も考えられる．

参 考 文 献

1）北島，古達，樫塚，永田　武庫川女子大学紀要　体育編34　P7　(1987)
2）北島，古達，樫塚，永田　教育論説資料収録論文集　8−5　P48　(1994) 東京
3）松本千代栄　ダンス表現学習指導全書　大修館　(1980) 東京